

伊豆大島における土手上的ヤブツバキ植栽及び住民の椿油用の実の採集利用

Study on the planting arrangement of *Camellia japonica* on the earthwork which called “Dote” and collecting utility of the seeds by residents for camellia oils in Izu-Oshima Island

大澤 啓志* 七海 絵里香**

Satoshi OSAWA Erika NANAUMI

Abstract: We investigated the planting arrangements on an earthwork around a residence and the residents' seed collecting activities on Izu-Oshima Island to understand how the use of *Camellia japonica* can transform the cultural landscape. At the study site, an earthwork was built around the residence in the first half of the 1900s when a resident settled there. A windbreak forest was then formed by planting the native species *C. japonica* and *Cerasus speciosa* on the earthwork. In total, 130 trees grew on the earthwork, which had a length of 96 m, among which *C. japonica* was the dominant species, accounting to 46%. Responses to a questionnaire indicated that many of the island's residents collect the seeds of *C. japonica* from windbreak forests around their homes and fields and take them to oil extraction traders as a raw material for camellia oil. This collection activity serves as a small-scale business and provides additional income, which acts as a management incentive to plant *C. japonica* windbreak forests. We judged that this activity was a minor subsistence practice because it also gave other rewards, such as health and fitness benefits and bringing a sense of fulfillment. The windbreak forest dominated by *C. japonica* with the earthwork was one of unique cultural landscapes, and it was the feature to renew the landscape through resident's management and use of a Camellia.

Keywords: windbreak forest, management incentive, cultural landscape, row of trees, earning extra business

キーワード: 防風林, 管理インセンティブ, 文化的景観, 並木, 小遣い稼ぎ

1. はじめに

住民の身の回りの空間に対する働きかけ、特にその土地に生育する植物の利用継続は、風土性を有する独特の景観を醸成する。例えば商業的利用として桜餅用のオオシマザクラ栽培¹⁾、菖蒲湯用のショウブ栽培²⁾等、それぞれの土地ならではの一定の文化性を持った在来野生植物の利用が、ユニークな農村景観を生じさせている例が知られる。これは地域固有の生態系サービスの発現の一つと見做せるが、生物資源材 (goods) のみならず、固有の景観形成といった文化的な恵与 (serves) まで含めた“人と自然の関わり”の豊かさの空間的反映³⁾と捉えることができる。一方、商業的利用とまではいかなくても、住民による身の回りの日常的な手入れや資源利用の時間蓄積による固有かつ良質な景観形成による文化的な恵与という視点は、ランドスケープ研究における重要なテーマと言えらる。在来植物の特性に応じた普段の暮らしの中での資源利用の継続は、生態的・社会的な正統性を持つ地域固有の景観形成といった農村ランドスケープの一つのモデルになると考えられ、その事例蓄積は意義あるものと考えられる。

このような背景の下、本研究では伊豆大島 (東京都大島町) におけるヤブツバキ (*Camellia japonica*) の防風林及び椿油利用に着目した。火山性で水田開墾が困難であった伊豆諸島においては、自生する故に防風林として選択的に利用されてきたとともに、椿油の原料となるヤブツバキは経済性を持つ有用植物となってきた。ただし一般的な商用作物と異なり、栽培植物化の過程が洗練されている訳ではなく、いわば宮内⁴⁾の唱える半栽培的な性質を強く持つ植物である。現在は長崎県の五島列島と東京都の伊豆大島・利島等が椿油の主要な生産地となっている⁴⁾が、実の搾油自体は、かつては国内において広く行われてきたと考えられる⁵⁾。本研究では地域固有の集落景観形成に寄与してきたと考えられる本種の選択的植栽について、①土手と呼ばれる防風堤上の植栽配置の事例的把握、②椿油用の実の住民による採集活動の実態把握を行った。これらより、伊豆大島のヤブツバキを利用した集落景観の特

徴を考察することを目的とした。

なお、伊豆諸島におけるヤブツバキ植栽に関する既往研究は、防風林利用における自生植物からの選択的な樹種利用の変遷⁶⁾、大島北西部の集落景観における格子状防風林の分布特性や特徴的な樹種構成⁷⁾、利島の椿油生産林の歴史とその土壌保全機能^{8,9)}等がある。しかしながら、最も身近な生活空間である自宅敷地周りについての具体的な植栽配置、そして土手と植栽が組み合わさることの空間特性についての報告は無い。また、集落内の植栽樹に対する実の採集活動についても明らかになっておらず、実態調査を基に在来植物ヤブツバキをめぐる住民の関わりにより形成された地域景観の特徴を検討することは意義あるものと考えられる。

2. 研究方法

(1) 対象地の概要

伊豆大島は、相模湾沖に位置する面積 91km² の火山島である。人口は約 6.1 千人 (2020 年 4 月現在) で、ピーク時の約 1.3 万人 (1940 年) から減少傾向にある。平坦地が少なく、産業は昔からある農業・水産業に加え、観光業が盛んである。大島町は特産品として椿油を PR しているほか、観光イベントとして毎年「椿まつり」が 2~3 月に開かれている。また、町の花として街路樹等の公共空間への本種の植栽も積極的に行っている。中心的市街地以外の集落には、防風目的で敷地境界や道路沿いにヤブツバキ等の植栽が広く見られ^{6,7)}、当地で「土手」と呼ばれる小規模な土塁上の植栽 (写真-1) も認められる⁷⁾。なお、伊豆大島で椿油搾りが始まったのは江戸時代中期前後であり、山畑の境界に列植される防風林も兼ねて実の採集用にヤブツバキが植えられるようになったのは明治以降とされる¹⁰⁾。

土手の植栽等の調査を行った北の山地区は島北西部に位置し、島内にあつて全体に平坦な地形が卓越し、飛行場が置かれている。当地区は概ね大正期に入植がはじまり、大正末から昭和 30 年代にかけて入植者が増加したとされる⁷⁾。また、伊豆大島を含む伊豆諸

*日本大学生物資源科学部 **株式会社 愛植物設計事務所

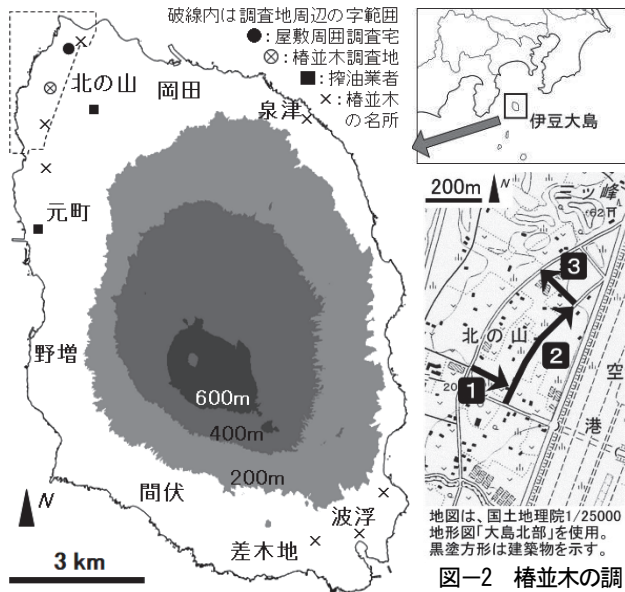


図-1 対象地の概要

図-2 椿並木の調査ルート

島は全国でも有数の強風地帯であり、12～1月には冬季季節風、春先から暖候期にかけては日本海低気圧、7～10月は台風の影響を強く受ける¹¹⁾。北の山地区の調査地周辺(大島空港以西の字北野、野地、赤禿、新開の範囲:図-1の破線内)には約170戸が在るが、内73%が防風林に囲われており、宿泊業、飲食店、レジャーショップ、新興住宅地、海岸近くのネザサ類に囲われた強風地の宅地では防風林が欠落することが多い¹²⁾。また、屋敷のみならず畑地境界等にも防風林を普通に見ることができる⁷⁾。なお、椿並木の名所は島内に8か所が知られている(図-1)。

(2) 調査方法

本研究では、防風効果を高めるために築いた土手と防風林の組合せが、現在も実の採取で利用されているといった気候風土と人の関りによって醸成される景観であることに着目し、個人宅の屋敷周囲及び観光資源となる椿並木の小径の土手構造及び土手上的の樹木の生育状況の把握を行った。前者は私的な、後者は積極的に来訪してもらうための空間である。これは既報の対象地周辺で卓越する格子状防風林の定性的な特徴⁷⁾に対し、土手と防風林の構造についてより踏み込んだ知見を得るためであり、後者についてはその性質上から空間特性の把握も行った。また、防風林の主要構成種であるヤブツバキへの関りの内実として、搾油業者に実を持ち込む住民を対象に広く島内全域での実態把握に努めた。このため、土手を伴わず主に行政が管理する主要道路の街路樹・公園、及び商業色の強い椿畑(後述)は対象から外している。

まず、屋敷周囲の土手における具体的な植栽(自然的な侵入樹種も含む)の把握を行った。これは北の山地区(字新開)で協力の得られた1軒に対して行った(図-1)。調査宅は、方形の敷地(面積約650m²)で南側は道路に接し、周囲は土手となっている。平屋建ての住居は敷地のやや北西寄りに位置し、隣に納屋(倉庫)があり、土手との間は平庭となっていた。大島の入植最盛期に北の山地区に入植し(後述)、現在まで旧来の土手・母屋・庭等の配置を概ね維持している対象地周辺での典型性を有する宅と判断した。調査は2014年夏季に行い、屋敷周囲の土手の構造及び土手上的の生育樹木の毎木調査とした。土手の構造は、長さ、上端部の幅、土手に沿って5m毎の高さ及び中ほどでの勾配の計測とした。毎木調査は、直径4cm以上の樹木について、胸高幹直径、樹種、位置を記録した。合わせて居住者(調査時:60代男性)に管理・利用状況等についてのヒアリングを行った。

次に、北の山地区で土手とヤブツバキの続く小径が観光資源と



写真-1 畑地境界の土手

写真-2 敷地周囲の土手

表-1 屋敷周囲の土手の諸元

配置	長さ	5m毎の土手の高さ(cm)	平均高	平均勾配	上端幅
東側	23m*	90, 130, 140, 120, 120	120cm	53°	130cm
南側	28m*	70, 50, 40, 80, 80, 60	76cm	50°	60cm
西側	21m	80, 100, 90, 80	86cm	51°	90cm
北側	24m	180, 180, 170, 90	155cm	56°	120cm

* : 隣接敷地の土手に連なって続いている。

して認識されている「野地の椿」(字野地:図-1)を事例に、土手と生育樹木の実態を把握した。伊豆大島には他にも椿トンネル・椿並木が知られるが(図-1)、「野地の椿」は未舗装路を含む旧来の土手の姿を止めている¹³⁾ため対象とした。なお、「野地の椿」は特に始点・終点が明示されている訳ではなく、あの辺りといった凡その場所を指すものであった。そこで本研究では、現地椿並木が卓越するのを確認した3調査ルート(図-2:1~3)を設定し、ルートに沿って道の両側の土手の高さの計測(ルート沿いに5m毎に計測)、及び土手上的の樹木の位置・樹種の記録、胸高幹直径の計測とした(直径5cm未満は除く)。合わせて、この椿並木の空間特性を把握した。この調査は、2014年夏季に実施した。

最後に、住民の実採集利用の実態や意識について、アンケート調査を実施した。当島では、住民がヤブツバキの実を集めて搾油業者に持ち込み、対価を得る仕組みが存在する(搾油業者へのヒアリングによる)。対価は搬入した実の量・状態に応じた現金、もしくは搾油後の椿油等が充てられている。調査時点で広く島民から実の搬入を受け入れていた搾油業者は2軒であった(元町地区及び北の山地区:図-1)。そこで、両業者に協力依頼をし、実の搬入に訪れた島民へのアンケートの配布・回収を行った(2014年秋季~2015年春季に実施)。

アンケート項目は、属性(性別、年齢代、居住地区)、主な実の採集場所(自宅/自身の畑/椿畑/街路樹/その他)、自身の所有地で採集した割合(20%毎の5区分)、年間の採集量、採集期の採集頻度(たまに/2週に1回/週に1回/週に2~3回/ほぼ毎日)、採集一回の使用時間(30分以内/30~60分/1~2時間/2時間以上)、ヤブツバキの保有場所(自宅/畑周辺/椿林/その他/植えてない)、所有地のヤブツバキの増減(増やした/変化なし/減らした)、地域のヤブツバキの防風林の増減認識(5段階の順序尺度水準)、実を採集する楽しみ(小遣い/運動/椿油/採集時の充実感/会話のタネ/その他/特になし)、採集や樹の維持の大変さ(樹の管理/草刈り等の周辺の管理/採集時の姿勢/採集に時間が要る/採集後の作業/搾油業者への運搬/金銭的見返りの低さ/その他/特になし)とした。

3. 結果

(1) 屋敷周囲の土手構造及び土手上的の植栽配置

調査宅の土手(写真-2)は、四方に各21~28m、計96m造られており、一部は隣接する敷地の土手に連なっていた(表-1)。ヒアリングによると、居住者は先代が1940年代より当地に入植し、防風のために人力で土手を築いたとする。合わせて土手には、防風目的にヤブツバキとオオシマザクラを植栽したとする。20年ほ

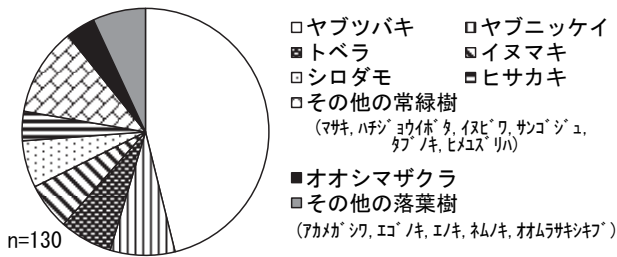


図-3 屋敷周囲の土手の樹種別本数割合

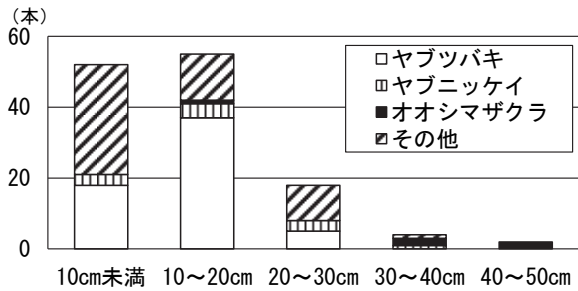


図-4 屋敷周囲の土手の樹木の胸高幹直径別のヒストグラム

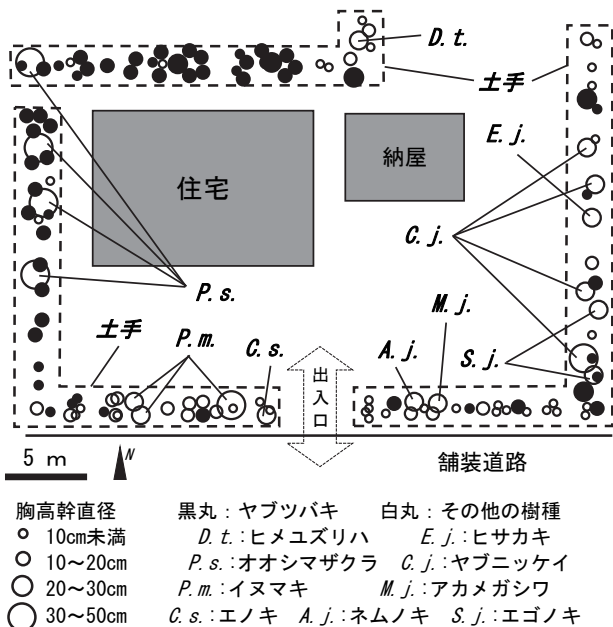


図-5 屋敷周囲の土手及び土手上的の樹木分布模式図

ど前に隣接道路の拡幅工事で家正面(南側)の土手が消失したが、直ぐに新たな土手を築いたとする。土手の高さは平均で76~155cmで、南側の新しい土手がやや低くなっていた。周囲の防風林の高さは土手も含めて約7~8mであり、平屋家屋(高さ約3.5m)に対し倍近くの高さの屋敷林に四方を囲われる状態であった。土手の平均勾配は50~56°で、上端部の幅は南側でやや狭く(60cm)、他は90~130cmであった。

土手上には計130本、18種の生育が確認された(図-3)。本数の最も多かったのはヤブツバキであり(60本で全体の46.2%)、次いでヤブニッケイ(8.5%)、トベラ(6.9%)、イヌマキ及びシロダモ(共に6.2%)と続き、常緑樹が多くを占めていた(89.2%)。落葉広葉樹は14本の生育に止まり(10.8%)、オオシマザクラが5本と最も多かった。胸高幹直径の度数分布は(図-4)、全体では20cm未満で多く、以降は最大49cmのオオシマザクラまで急減した。ヤブツバキは10~20cmのものが最も多く、30cm以上の個

表-2 「野地の橋」の道沿いの土手・樹木の概要

	ルート1		ルート2		ルート3	
	左側	右側	左側	右側	左側	右側
延長(m)	137	174	473	466	186	184
路面状況	土・露岩		アスファルト舗装		砂利敷き	
平均土手高(m)	1.72	1.39	0.97	1.04	1.50	1.66
(最小-最大)	(1.4-2.0)	(0.5-1.7)	(0.1-2.4)	(0.1-2.5)	(0.8-2.4)	(0.9-2.5)
n	27	34	80	82	37	36
樹木密度(本/10m)	7.7	8.1	5.2	5.7	10.3	7.4

注: ルート1の左側は、途中まで建築物があり土手が不在で右側より短い。ルート2は、隣接敷地への開口部が随所にあり、そこを外して計測したため延長に対してn数は少ない。

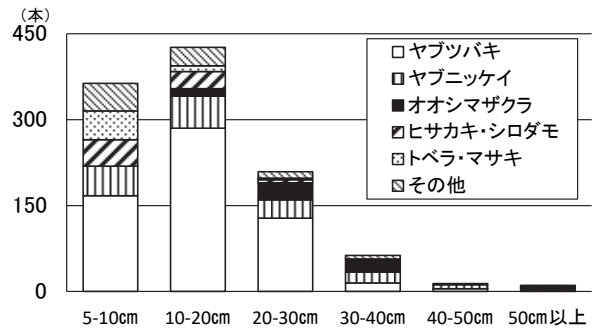


図-6 「野地の橋」の道沿いにおける土手の樹木の胸高幹直径別のヒストグラム

体は認められなかった。オオシマザクラは、全5本中4本が30cm以上の大径木であった。

土手における主要な樹木の配置は図-5に示す通りであり、周囲の土手に帯状に樹木が生育していた。ヤブツバキは西側及び北側で比較的多く、特に北側には径の大きな個体が多く生育していた。これに対し、比較的新たに作られた南側の土手では生育数が少なく、それらは径の小さな個体であった。他の樹種の分布では、敷地の西側にオオシマザクラの大径木、東側にヤブニッケイの中~大径木が特徴的に認められた。また、南側には陽樹のエノキ、ネムノキ、アカメガシワの中径木が生育していた。

ヒアリングでは、居住者も土手とその上に生育する防風林による防風効果は強く認識しており、土手の草刈りや伸びすぎた枝の剪定・倒木処理等の管理を行うとともに、ヤブツバキの実を採集し搾油業者に持ち込んでいた(年間7千~1万円程度の収入)。入植当時、ヤブツバキに加えてオオシマザクラも成長が早くまた冬場の日照確保になるとして、1:1の割合で植えたとする。なお、20年前の南側土手の新設時以外に、土手上への日常的な新たな植栽は特には行ってはなかった。

(2) 「野地の橋」の橋並木の土手・生育樹木及び空間特性

「野地の橋」の橋並木約0.8km(図-2)にわたって調査した結果、基本的には道の両側に土手が連続していた(表-2)。ルート1・3が未舗装路、ルート2がアスファルト舗装路であり、ルート1のみ自動車の通行できない道幅であった。土手の高さは、平均0.97~1.72mであり、ルート2でやや低くなっていた。これは途中で、一部の畑地境界でほとんど崩れた状態の土手(高さ10~50cm程度)が認められたためである。

土手上には計1,086本の樹木の生育が確認され、本数割合的にはヤブツバキが55.5%(603本)と卓越し、次いでヤブニッケイ(15.6%)、オオシマザクラ(6.2%)の順であった。ヒサカキ、シロダモを加えた上位5種で全体の84.8%が占められていた。距離当たりの密度は5.2~10.3本/10mであり、ルート2でやや低くなっていた。3ルートでの総計では6.7本/10mであった。胸高幹直径別の度数分布(図-6)では、全体及びヤブツバキは10~20cmの階級で多くなるのに対し、オオシマザクラは20~30cmあるいは30~40cmの階級で多くなっていた。



写真-3 「野地の樁」の土手と防風林によるトンネル状の小径

表-3 搾油業者への搬入をしていた回答者の居住地区

元町(1-4丁目)	元町(左記以外)	岡田	野増	差木地	波浮	泉津	北の山	間伏	未回答
11	35	16	4	13	3	4	1	1	2
(12.2)	(38.9)	(17.8)	(4.4)	(14.4)	(3.3)	(4.4)	(1.1)	(1.1)	(2.2)

注: 数字は回答者数、括弧内は割合(%)を示す(n=90)。

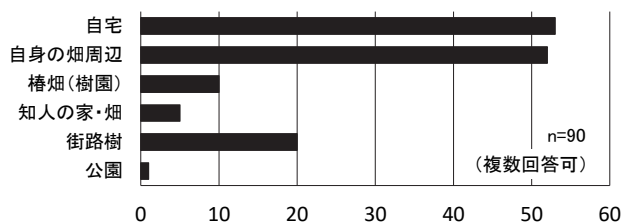


図-7 主な実の採集場所

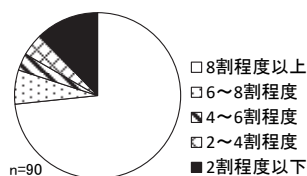


図-8 所有地での採集割合

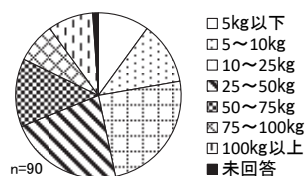


図-9 年間の実の採集量

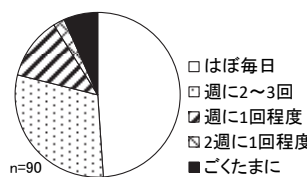


図-10 採集期の採集頻度

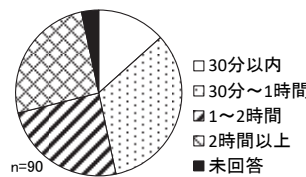


図-11 採集一回の使用時間

その樁並木内の道を歩く際の空間特性は、両側にアイレベル前後の高い土手が伸び、その上に大径木の幹群が連なり、枝葉に覆われたトンネル状の道が奥まで続くものであった(写真-3)。両側の土手の高さは目通り前後で変化し(表-2)、時には目通りを越える凹構造となった。両側の土手は苔むし、壁面からシダ類が葉を伸ばしているのが普通であった。土手上からは道側に傾斜して樹木の幹が枝を分けて乱立し、上方は枝葉で覆われていたが、好天時には木漏れ日が射すのが認められた。

(3) 住民によるツバキの実の採集利用

アンケートは計90部得られた。調査期間中の配布枚数は不明であるが、例年100~200人程度が搾油用に実を持ち込むとされる。回答者の属性として、男性34%、女性61%、20代0%、30代2%、

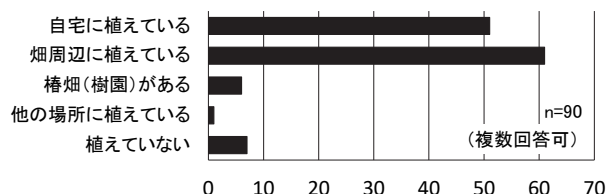


図-12 保有するヤブツバキの植栽場所

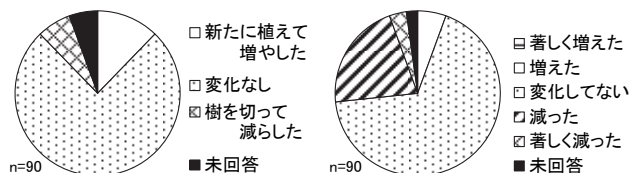


図-13 所有地のヤブツバキ 図-14 地域におけるヤブツバキ防風林の増減認識

40代7%、50代13%、60代37%、70代27%、80代以上13%であり、60代・70代の女性が多くなっていった。居住地区は、最も人口の多い元町地区の周縁農村部(中心市街地1~4丁目以外)が39%と高い割合であったが、島内全域の地区が認められた(表-3、図-1)。

実の採集場所は、自宅敷地及び自身の畑周囲の防風林が突出して多く(58~59%)、次いで街路樹がやや多く(22%)になっていた(図-7)。また、実採集用の樁畑を採集地としている回答も10件見られた。所有地での採集割合は、「8割以上」が突出して多く(73%)、次いで「2割以下」(12%)もやや多くなっていった(図-8)。年間の採集量は25~50kg(24%)と50~75kg(22%)がやや多かったが、5kg以下から100kg以上まで幅広く認められた(図-9)。採集頻度は「ほぼ毎日」が約半数を占め、「週2~3回」(30%)と併せて多くの回答者は高い頻度で採集していた(図-10)。一回の採集時間は「30~60分」が最も多く(33%)、次いで「2時間以上」(26%)及び「1~2時間」(24%)が同程度となっていた(図-11)。ヤブツバキの保有場所は、「畑周辺」(68%)及び「自宅」(57%)が突出して多く、一方で「植えていない」も少数(8%)認められた(図-12)。所有地のヤブツバキの変化は、多くが「変化なし」(76%)としたものの、「新たに植えて増やした」(12%)が「樹を切って減らした」(7%)を上回っていた(図-13)。地域のヤブツバキ防風林の量的な変化認識は、多くは「変化なし」(68%)であったが、「減った」(21%)もやや多くなっていった(図-14)。これに対し、増加認識の回答は極めて少なかった(計6%)。

実の採集の楽しみについては、「お小遣いになる」が突出して多く(73%)、「いい運動になる」「椿油にもらえる」「充実感」が29~35%の回答であった(図-15)。「知人との会話」や「子や孫とのレクリエーション」も少数見られ、その他としては「綺麗になる」「無心になりストレス解消」「もったいない」「生活リズムが整う」「地域の発展」等が得られた。大変さについては、「周辺の管理」が最も多く(53%)、「時間がかかる」(33%)、「体勢が辛い」(30%)、「チャドクガ等」(20%)の順であった(図-16)。また、「特に大変なことはない」が14%で得られた。その他としては、「リスの食害」「自身の所有樹がない」等が挙げられた。

4. 考察

ハードとしての構造すなわち土手の状態及び樹木生育状況、そして実の採取利用者の関わりと言ったソフト面について、地域固有の景観形成の視点より調査を行った。まず、空中写真と現地調査により本北の山地区には防風林が格子状に卓越し、主要な通りから観察される防風林の相観植生を報告した原ら⁷⁾に対し、屋敷

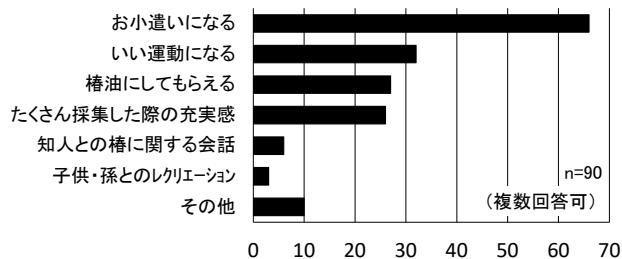


図-15 実を採集する楽しみ

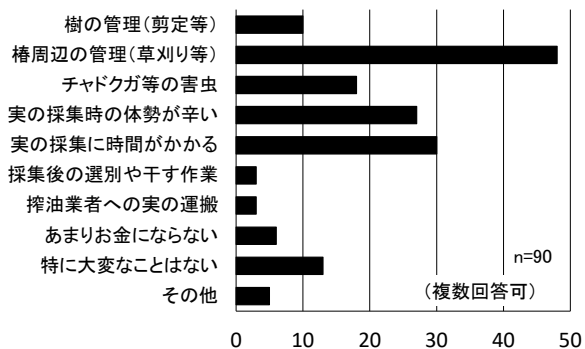


図-16 採集や樹の維持の大変さ

周囲・名所の椿並木各 1 サンプルと事例的ではあるが土手と防風林の組合せの具体的構造 (図-3~6, 表-1, 2) を提示できた。それは土手の造成と植栽を起源とするものであったが、ヤブツバキが優占するものの在来常緑樹を中心に多様な樹種・幹径樹の生育が認められ、土手が生育基盤を提供する形で周囲からの種子散布・定着を受けつつ成立した防風林であることが明らかになった。一方で、その根が土手を強固にする役割も果たしているのが観察され (写真-4)、林と人工生育基盤が相補的な状態で存続していることも特徴の一つであった。

ヤブツバキは植生学における暖温帯のクラス標徴種であり、我が国の南西部の低地域を占めるヤブツバキクラス域に普通に生育する¹⁴⁾。伊豆大島も自生分布域に含まれ、換金式の椿油搾りが広まる以前より防風林として利用されてきたと考えられる。これは沖縄のフクギ、関東~中部太平洋沿岸部のイヌマキ、関東内陸部のカシ類等、自生樹木の選択的利用による屋敷周りに帯状・線状の防風林・生垣を持つ集落景観を発達させたもの¹⁵⁾の一つに相当する。ただし、防風機能を強化するために屋敷周囲に「土手」を築き、その上にヤブツバキ等を植える工夫が凝らされているのが大きな特徴であった (図-5)。これに対し、足摺半島 (高知) の防風・防潮のために設けられた屋敷周りの椿の生垣¹⁶⁾、房総半島 (千葉) の大原町でのツバキ (花の変異が多く園芸種の要素が強い) の屋敷囲い¹⁷⁾が知られるが、いずれも刈り込まれた生垣で土手は付随せず、本地区とは大きく異なる。また、土手 (土塁・土居) と防風植栽の組合せは、マキベイ (千葉)¹⁸⁾、築地松 (島根)¹⁹⁾ 等で断片的に報告されるが、本大島のような地域的な広がり⁷⁾ は認められていない。このように本調査地周辺の集落景観は他に例の無いユニークなものであることが示され、それは島嶼故の多方向からの強い風 (特に台風や季節風) から土手と自生常緑樹主体の林を周囲に高く配して居住生活空間を守る気候景観の一つと言える。これに対し、大島南東部の浮波地区を調査した奥田・中村⁶⁾は、同様に格子状の防風林が発達するが、所によって土塁や石垣の上に植栽されるとしており、基本的には土手ではなく地表面上に防風林が成立していることを報告している。すなわち、土手と植栽の組合せからなる防風林にも偏在性が認められ、島内での分布傾向とその規定要因の把握が求められる。

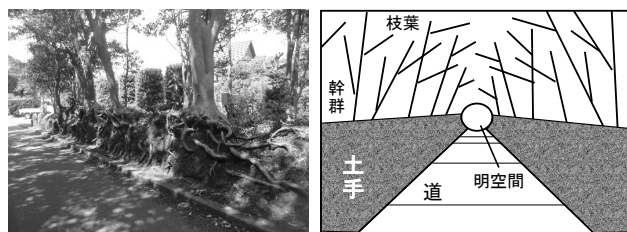


写真-4 露出した根によって維持される土手

図-17 椿並木の空間特性の模式図

調査した宅では土手上にはヤブツバキを主体としつつも多様な樹種が生育しており (図-3)、オオシマザクラの大径木も西側の土手で散見された。これは当地区では入植初期に防風効果を早く機能させるため、成長の早い自生樹種オオシマザクラを成長の遅いヤブツバキに混ぜて植えたとされ⁷⁾、本調査宅でもヒアリングで同様の回答を得ているが、加えて落葉による冬季の日照確保も理由の一つとされた。また、東側の土手にはヤブニッケイの大径木が散見されたが、特に植栽していないことより、周囲からの実生由来の個体と考えられる。これら自然的な樹木の定着も許容しつつ、防風効果を確保してきたものと言える。一方、椿並木の名所「野地の椿」の種構成は調査宅と類似しており (図-3, 4, 6)、ヤブツバキに次いで自生常緑広葉樹の本数が多く、中~大径のヤブニッケイ・オオシマザクラが混じるのが特徴であった。すなわち土手上の生育樹木に関しては、屋敷周囲といった私的な空間と椿並木の名所における大きな差は無いと言える。

しかしながら、名所としての「野地の椿」の空間特性として、小径に沿って個々の宅や畑地の土手がひと連なりとなって独特の様相を呈することが特筆された。すなわち、①正面奥の小さな明空間に向かって収斂する形に、②足元から延びる道、③道両側の下方から目通りまでの高さで視界を限定する土手、④両側の土手から上方に伸びる幹群と枝葉からなる天蓋、によって構成されていた (図-17)。それは、土手と幹群・枝葉によりトンネル状となることでビスタを固定し、散策者に進む方向を示すとともに、奥の小さな明空間に連なることで何か特別の世界に入っていくという感覚を持たせるものであった (写真-3)。また、土手 (及びコケ・シダ類)、樹木の幹といった自然素材の連なりにより、単調に陥らない適度な複雑さを持ち、それにより散策者に心地よい空間体験を催すと考えられた。これは、重要な建築へのアプローチや神社の参道等に用いられる伝統的な外部空間設計手法²⁰⁾に類似するものと言える。このようにヤブツバキの防風林自体は各地で見られるものの、椿並木の名所として認知されるには単なる土手と防風林の組合せの集積のみならず、独特の空間特性が備わっていることが一つの要件であると考えられた。

次に、本防風林の主要構成種であるヤブツバキと住民の関わりについて考察する。先述の通り、本ヤブツバキ防風林は日本各地に在る防風林・生垣を持つ集落景観の一つであるが、これらの中にあつてヤブツバキの特異性は実から椿油という一定の経済性が得られることにある。本調査でも、搾油業者に実を持ち込んでいる住民の多くが、金銭的あるいは物的 (椿油にしてもらう) な対価をインセンティブとしていた (図-15)。ただし、他にも多様な意味合いが付加されており、マイナー・サブシステム²¹⁾としての色合いも強く有していた。アンケート結果より、人口の多い元町周辺の住民による持ち込みが多いものの島内の広い範囲でこれらの活動が行われていること (表-3)、年間の採集量は個人によるばらつきが多いこと (図-9)、自身の所有地での採集が基本である (図-7, 8) ものの公共の街路樹での採取活動も比較的多く行われていること (図-7) 等が明らかになった。また、楽しみにおいて運動や充実感等も比較的多く挙げられており (図-15)、週



写真-5 実採取のための椿畑



写真-6 椿畑での落ち葉焼き

2~3回以上が多い(図-10)一方で採集時にはばらつきが見られ(図-11)、各自のペースに合わせて採集活動が行われていた。これには採集時の体勢の辛さや時間がかかるといった負の要素(図-16)も関与していると考えられる。大変さには、上記の採集活動時以外にも周りの草刈り等の周辺の管理が多く挙げられた(図-16)。これは日常的な所有地の除草管理に加えて、草刈りをしておかないと実の発見率が低下し、採集活動の効率が落ちるためとされる(ヒアリングより)。なお、「チャドクガ」を挙げる回答者も散見し、ヤブツバキの利用に特有の事象と言え。このように、管理も含めて住民が継続的にヤブツバキ防風林との関わり保つ上で経済的受益性の役割は認められたものの、最大効率化を図るような生業的な活動ではなく、運動や充実感といった要素も含めた多義的な関り(図-15)であることが明らかにされた。

植村²²⁾は、近傍の利島において住民が主に定年後にツバキ実生産を始めて生計の維持を図っている事例を報告している。この利島の生業的な実の生産活動に対し、本大島では一部の椿畑(畑に格子状あるいは複列状にヤブツバキを植えた樹園で椿林とも呼ばれる：写真-5, 6)での実生産農家を除き(契約・納品の形を取る)、住民の採集活動の多くは個別に搾油業者に持ち込む小遣い稼ぎ程度の余暇活動であった。一方で、採集期には高頻度で主に自身所有の防風林等の傍に訪れる(図-7, 10)とともに日常的な手入れも行っている実態(図-16)が明らかにされた。このため、所有地でのヤブツバキの量的変化は全体としては「ない」が卓越するとともに、減らすよりも増やす方がやや多くなっていた(図-13)。これは地区単位で減少傾向と認識している回答者が1/4程度いること(図-14)と相反するが、実の採集活動をしないう住民にとって防風林は(維持管理コストを含め)無用として切られる場合もあることが示唆される。いずれにしても採集活動を行う住民にとっては、規模は小さいもののその経済的受益性によって、身の回りの防風林を含むヤブツバキ植栽を維持し日常的な手入れを行うインセンティブが働いていた。ただし、本研究では実の採取を行っている住民の活動や意識に止まり、実の採取を積極的には行っていない住民とのヤブツバキ防風林の関わり方の把握までは至っていない。実の採取の有無による屋敷周囲の植栽状況や管理状況の差異の把握や、それを踏まえての集落景観維持に住民が関わりを保ち続けることの有効性の検討が今後の課題である。

以上、入植時期(大正期以降)を考慮すると70~100年弱の時間蓄積であるが、本地区の土手及びヤブツバキ等からなる集落景観は、防風林としてまた小遣い稼ぎといった楽しみ(管理時の若干の苦労も含む)を持ちつつ住民が日常的に関わることで醸成されてきたユニークなものであり、特色ある文化的景観の一つであると考えられる。また、(道路の拡幅による土手の消失といった)近代化される以前の形態で残る集積地では、独特の空間特性を持つ場合はその椿並木は観光資源として認識され、結果としてそれは住民自身の地域景観の再評価に結び付くと考えられた²³⁾。ここには、椿油用の実といった生物資源材を介してその防風林に住民がマイナー・サブシステムとして継続的に関わりを持つとともに、ユニークな文化的景観の醸成そして住民の地域景観の再評価を含む椿の花と独特の空間構成(図-17)からなる観光資源化²⁴⁾

といった文化的な恵とまでが成立している構図を見て取ることが出来る。このように、在来植物ヤブツバキを主とする対象地域の集落景観は、受動(防風対応)と能動(実の採集に伴う日常的な手入れ)の両側面から住民による身の周りの空間への働きかけによって、現在も維持更新が行われている²⁵⁾という特徴を有していた。その土地に自生する植物を介した住民の身の回りの空間への働きかけは、時に豊かな地域景観を醸成するものであり、その構造や機構について、各地の事例蓄積が待たれる。

謝辞：調査協力を頂いた大島町在住の中嶋寿郎氏、株式会社 椿の福井元気氏、有限会社 高田製油所の高田義士氏に謝意を表します。本研究は科学研究費補助金 基盤研究(C) #20K06114「在来野草類を用いた農村ランドスケープの空間価値向上手法に関する研究」(代表者：大澤啓志)の成果の一部である。

補注及び引用文献

- 1) 七海絵里香・大澤啓志・勝野武彦(2013)：伊豆半島松崎町における桜葉畑景観の成立過程：ランドスケープ研究 76(5), 443-446
- 2) 大澤啓志(2015)：行方市北浦地区における在来植物の文化的利用を背景とするショウブ栽培に関する研究：農村計画学会誌 34, 291-296
- 3) 宮内泰介(2009)：半栽培の環境社会学：昭和堂, 251pp
- 4) 有岡利幸(2014)：つばき油の文化史：雄山閣, 257pp
- 5) 例えば、有岡²⁶⁾は『延喜式』(927)に主に西日本の各国の租税に椿油が挙げられていることを、野本²⁷⁾は寒冷な東北地方沿岸部に点々と椿山があるのは椿油の実用性により人が播種した可能性を指摘している。また、三河・遠江地方を対象に1680年代頃に記された農書『百姓伝記』に「椿を植る事：実を取、油の料に用る」²⁸⁾とあり、自家消費も含め各地で搾油が行われていたと言える。
- 6) 奥田重俊・中村幸人(1989)：伊豆大島波浮港における防風林について：横浜国立大学環境科学研究センター紀要 16(1), 107-118
- 7) 原裕太・関戸彩乃・浅野悟史・青木賢人(2015)：伊豆大島の防風林形成過程にみる地域生物資源の利活用：E-journal GEO 10(1), 67-80
- 8) 巽二郎・三竹かおり(2003)：利島における油料ヤブツバキ林の変遷：東海作物研究 134, 5-7
- 9) 巽二郎(2007)：植物資源の生産力と環境保全機能—伊豆利島における採油ヤブツバキ林の事例：京都工芸繊維大学環境科学センター報(環境) 19, 30-43
- 10) 立木猛治(1973)：伊豆大島志考：伊豆大島志考刊行会, 469pp
- 11) 大島町史編さん委員会(2000)：東京都大島町史 自然編：東京都大島町, 133-180
- 12) 『ゼンリン住宅地図 東京都大島町』(ゼンリン)及び空中写真より判読
- 13) 例えば、町のパンフレット「大島ツバキめぐり」では、「野地の椿」について「椿のトンネルになっており、昔の面影を残した情緒ある場所です」と紹介されている。
- 14) 宮脇昭・奥田重俊編(1978)：日本植生便覧：至文堂, 850pp
- 15) 大澤啓志(2016)：群馬県甘楽町那須集落の高生垣の特徴：農村計画学会誌 35, 307-313
- 16) 文化庁文化財部記念物課監修(2005)：日本の文化的景観：同成社, 146
- 17) 柳井重人・石井正一・丸田頼一(1993)：千葉県大原町におけるツバキを中心とした生垣の分布実態に関する研究：造園雑誌 56(5), 277-282
- 18) 不破正仁(2016)：関東地方の屋敷林、中央公論美術出版, 213
- 19) 長野和雄(2019)：出雲平野、築地松の造形と機能：BIOCITY 80, 64-71
- 20) 芦原義信(1975)：外部空間の設計：彰国社, 185pp
- 21) 松井健(1998)：マイナー・サブシステムの世界、『民俗の技術』(篠原徹編)、朝倉書店, 247-268
- 22) 植村円香(2009)：東京都利島村におけるツバキ実生産による高齢者の生計維持：地理学評論 84(3), 242-257
- 23) 例えば、北の山地区で住民に椿の名所を聞くと「野地の椿」を紹介される。これは住民も当地区を代表する椿の景観として、その価値を認識していることの証左と言える。
- 24) 当椿並木ではヤブツバキは高木化しているため、開花期であっても枝先に咲く花を直接観賞することは困難であり、落ちてきた花の散見する小径を歩くことで、開花を想像するに止まることになる。ただし、「伊豆大島=ヤブツバキの名産地」は既に一般に定着しているため、椿並木を散策する上ではそれで十分と言えるし、開花期以外の散策時にもこの連想は通用すると考えられる。
- 25) もちろん大島でも人口減少と高齢化が進んでおり、集落景観の維持更新の持続性については今後とも観察した上で検討が必要。
- 26) 野本寛一(1987)：生態民俗学序説：白水社, 423-427
- 27) 岡光夫・守田志郎(1979)：日本農業全集 16 百姓伝記 巻1~巻7：農山漁村文化協会, 145

(2020.9.26受付, 2021.3.30受理)